

第21回 福岡女子大学附属図書館所蔵資料展(2006年1~2月)



大正女子大学附属図書館の本を
見るとなると

小さな本の大きな世界

前回の展示では、画集・墨跡・原稿複製など、大型本が多くを占めたので、今回は一転して小型本を集めてみた。小型の本としては、文庫版・新書版が今日では代表格であるが、更にそれよりも一回り小さいサイズの、豆本・袖珍本などよばれるものもある。今回はこの小型本を中心に特集を組んでみた。



(1) 『ポケット・ブック・コレクション』小山書店(55年10月30日、各冊40円)

文庫本のちょうど半分の大きさで、小さなポケットにも収まるサイズである。三方折り返しにしたフランス装も実に愛らしい、当時の通常の文庫本と逆で下小口を化粧裁ちしていない。『青春の文学』というサブタイトルにふさわしく、啄木・敏・藤村・晶子の詞華集に『たけくらべ』『坊っちゃん』『山椒大夫』『若きエルテルの悩み』『田園交響楽』などを含む。当時の若者には愛読されただろうが、今日では公立図書館、大学図書館にはほとんど所蔵されていない。各冊分売されたが、セット購入には化粧箱も付けられた。

都道府県立図書館を横断検索してもデータにはほとんど出てこないが、福岡県立図書館には続刊『青春の文学』を所蔵。国会図書館以外では完揃いを閲覧しにくいシリーズが、県立福岡女子大学と福岡県立図書館との蔵書を併せることで全体像が確認できるのは貴重である。

(2) 『胡蝶掌本』(胡蝶の会、非売品、刊行中)

石橋一哉が代表を務める、会員組織胡蝶の会の豆本。柵形本と言っても良い独特の判型と、手作りの暖かさが伝わってくる、滋味掬すべきシリーズ。各冊内容が高水準であるのは言を俟たないが、表紙をずらりと並べて見るだけでも楽しい。いくつかの連載ものを含み、長谷川卓也『戦中読書悲録』『私の銀幕残映』は市民の側からの記録として、小林信彦の著述などと併読すべきもの。古書店現世の主人で、雑誌『未来』や古書目録逍遥末尾の店番日記などに達意の文章を展開する向井透史は、『早稲田古本劇場』継続刊行中。第百冊目の八木福治郎『本の中で』には、大阪万博の開かれた1970年から刊行を始めた「古通豆本発刊覚書き」の貴重な証言がある。

(3) 『胡蝶豆本』(胡蝶の会、非売品、刊行終了)

胡蝶掌本の前身と言って良いシリーズ。ここでは胡蝶豆本13の吉田直弘『川端本有情』を展示した。限定150部の88番本。吉田の川端本三部作の嚆矢で(他の二つは19『川端本揺曳』、24『川端本光芒』。吉田にはほかにも『細川書店本』という好著もこのシリーズから刊行している)扉の前には「吉田直弘様 川端康成」の筆跡を影印で載せている。三部作共に、内容・装丁相俟って一つの世界を構築する川端本に迫った好著である。その著者らしく、並装本以外に作成された特装5部本では、『伊豆の踊子』『千羽鶴』『東京の人』などをデザインした美しい外箱に収められている。参考のために、特装本三冊を併置した。

(4) 『こつう豆本』(日本古書通信社、1970年~)

豆本の名前を冠したものは全国に多種多様なものがあるが、その中でも最も良く知られ、また最も広く普及したものが、日本古書通信社の『こつう豆本』のシリーズである。現在までに141点刊行、とじひもが可愛い袋入り並製本と、革装・布装など装丁に意匠を凝らした特製本とがある。

ここでは、並製本として、第82・弥吉光長『チェンバレンの交友』(88年11月、500円、表紙カットはアイヌ模様)を、特製本として第36・今村秀太郎『やぼんなど白水社本』(78年9月、著者家蔵本、革装「古東多祀(ことたま)」題字箔押)を展示した。後者所収の「白水社特製限定版書目」のうち、東郷青児装『窄き門』は局紙装本386本を、同書を翻訳した山内義雄の文章を集めた『翻譯者の反省』(『こつう豆本』117)は特製本を、共に本学で所蔵。第7回所蔵展で展示した。

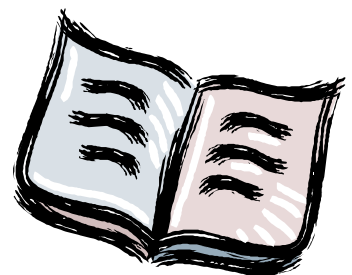
(5) 『日本文学選』(光文社、1945~49年)

小型本の代表格は何と行っても文庫版である。アテネ文庫や岩波文庫以来、日本の出版文化の重要な部分を担ってきたが、ここでは終戦の混乱まださめやらぬ時期に、文庫版で近代日本文学の名作を多く刊行した『日本文学選』を掲出した。時代が時代だけに国会図書館の所蔵も30冊弱で、全体の6割にも満たない。本学では9冊を所蔵。1冊あたりの単価も、10円以下で出発したものが100円台になるなど、当時のインフレの激しさを反映している。ここでは、初期のものから、国木田独歩『武蔵野』と樋口一葉『たけくらべ』を展示した。どちらも国会図書館のNDL-OPACには所蔵情報がないもの。独歩はこの叢書では5冊と厚遇されている作家であり、巻末広告には漱石選集と並んで独歩選集の名も見られる。『たけくらべ』は確認できるだけでも、9円17円22円70円とめまぐるしく定価改定がなされている。

猶、円本時代の改造社『世界大衆文学全集』平凡社『新々傑作小説全集』を初めとして文庫サイズの全集は意外に多い。

(6) 『戦後十年名作選集』(光文社、1955年、各冊130円)

『日本文学選』にやや遅れて、同じ光文社から、新書版ですぐれたアンソロジーが刊行されている。戦後十年の代表的な中・短編小説39作を7冊の新書版に収めた。三島・大宰・野間・堀田・梅崎・大岡をはじめ戦後派の錚々たる作家が、田宮虎彦『足摺岬』、丹羽文雄『嫌がらせの年齢』、林芙美子『晚菊』、上林暁『聖ヨハネ病院にて』、原民喜『夏の花』など一時代を画した名作がずらりと並んでいる。編集にあたった臼井吉見の、ですます調の解説も分かりやすく水準が高い。解説と言えば裏表紙の「作者紹介」も簡にして要を得たもの。一冊一冊が色違いの装丁もすばらしい。



(7) 丹羽文雄『鮎』(未来工房、1983年、6500円)

胡蝶豆本やこつう豆本の特製本に見たように、豆本には装丁そのものに意匠を凝らし、存在自体が小さな芸術作品であると言っても過言ではない。掲出書はその代表格である。

浅田次郎や赤江莫瀑らの豆本を手掛ける未来工房が刊行したもの。吉井勇の『わびずみの記』特製本を彷彿とさせる表紙に、純銀製の鮎が美しい姿を見せている。丹羽文雄のいわゆる「生母もの」の代表作。限定260部のうちの第90番本、著者の署名が入る。

(8) 丹羽文雄『鮎』(成瀬書房、特別愛蔵本、1973年、85000円)

対照の妙を考えて、同じ丹羽の『鮎』の大型の豪華本をもう一冊展示する。

1970年代、80年代を中心に特異な限定版を多く世に送った成瀬書房が刊行したもの。成瀬書房は「署名入り限定版文学全集」を意図し、200部前後、20000円前後の限定本を約80種刊行している。部数の多さや、求めやすい価格など、これらはいわば限定版の普及版とも言うべきものである。成瀬書房は、更にこの中から10数種を、大型の「特別愛蔵本」として別途刊行している。こちらは11部から30部程度、価格も35万、40万というものまでである。本書は「特別愛蔵本」の第一冊目を飾るもの。永田一脩が岐阜県馬瀬川で釣った鮎の魚拓をそのまま表装したもの。見返しに金布目和紙、三方金は22金を使用という贅沢な作りである。二重箱入り、内箱は会津産桐箱、外箱蓋裏に鮎の郵便切手と限定番号を記した小紙片を貼付。市販限定30部のうち第21番本。

